

# 日中科学技術

No. 35

1983.10.20

発行所  
日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島3-1-6  
小宮ビル2F 電話 03 (836) 4830

## 第20回常任理事会についての報告

9月3日、神田学士会館で第20回常任理事会が開かれた。

出席者は次のとおりであった。

(会長) 有山兼孝, (常任理事) 鹿取一男, 野上茂吉郎, 橋口隆吉, 和達清夫, 渡辺武男, (幹事) 相馬胤和, (事務局長) 肥後孝

### 1. 報告事項

(1) 中国科学院外事局から、会長、事務局長の訪中(9月12日~24日)の際の訪問予定地を、北京、瀋陽、長春、哈爾濱とするとの連絡があった。

(2) 中国水利学会水資源保護視測技術訪日視察団の団員名簿および日程は別項(日中交流ニュースの項参照)のとおりほぼ決定し、関係機関に協力依頼中である。これに伴う照会事項については、会長訪中の際に先方の意向を聞く予定である。

(3) 東北大学御子柴宣夫教授の北京大学での集中講義は明年3月~4月の予定になっていたが、同大学における新研究所設置その他の理由で延期のやむなきにいたり、そのことを同教授から北京大学に申し送ったとのことである。

### (4) その他

(i) 中国の大学での集中講義(7~8月)に関して教育部に照会中の件は回答未着のため、本年中の実施は見送ることになった。この件については、訪中の際、会長と教育部とが話し合っ、双方に都合のよい方法を見出してほしいとの意見があった。

(ii) 「人類史教育研究訪中団」(8月19日~27日)(会訪 No. 34 参照)は予定どおりのスケジュールを終了して帰国した旨、団長からの連絡を受けた。和泉原人遺跡を外国人として初めて見学し、また、北京の小学校で教師同士の話し合いが実現するなど大きな成功をおさめたとのことである。

### (iii) 事務局異動

道口直美は9月末退職の予定で、後任として、竹内美智子が紹介された。

## 2. 審議事項

### (1) 協会援助事業採択案件

#### (i) 中国人留学生への研究費交付

a. 指導教授 小川智哉教授(学習院大理学部)  
留 学 生 崔承甲  
研究題目 CaF<sub>2</sub>単結晶の格子欠陥  
交付開始月 9月

b. 指導教授 有山正兼教授(電気通信大学電気通信学部)

留 学 生 許夏鎮  
研究題目 数値解析および計算機ソフトウェア  
交付開始日 9月(6ヶ月)

#### (ii) 会員の訪中旅費援助

a. 会員氏名 志水正男(名古屋大学工学部教授)  
招待機関 北京大学

講義題目 遍歴電子磁性

訪中時期 9月20日～10月19日

b.  
会員氏名 奥島基良(東京工業大学教授)

招待機関 ハルビン船舶工程学院

講義題目 水中音響学

訪中時期 9月5日～10月2日

(iii) 中国科学者訪日滞在費援助

会員氏名 坂部知平(名古屋大学理学部助教授)

訪日学者氏名 戴全壁(中国科学院生物物理研究所研究員)

補助要旨 蛋白質結晶解析に関する講演、討論、共同研究についての連絡協議のための宿泊・交通費

(2) 審査委員会提案事項について

(i) 委員会の名称変更

審査委員会を「援助事業審査委員会」と改称して任務内容を明示したいという委員長から提案が諒承された。

(ii) 援助申請書取扱い上の留意点

a. 援助資金の交付は、会員の自制と支持をまって初めて可能になるものであるから、その配分は多くの会員になるべく公平であるように配慮し、また一層の自助努力を望むべき費用はこれを含めないように留意する。

b. 会費未納の会員への援助は採択しない方針を明示する。

c. 会員期間の長い会員を採択上優先できることとする。

(3) 協会援助事業と財政問題

(i) 昭和57年度決算、58年度年間予算および7月までの収支状況の報告にもとづき意見交換が行なわれた。その結果、協会援助事業に寄せられる大きな期待に相応する収支の適合は容易でない事情が了承された。

この困難を克服するための種々の財源増加策が検討された。

## インスリン構造研究の交流

名古屋大学理学部化学科 坂部 知平

2. 京都、名古屋、筑波

戴さんは8月17日から11日間京都で開かれた国際結晶学会主催の International Computing School にご出席のため来日された。8月27日(土)

正午に School が終了したので日本と中国文化の伝統的なつながりを知っていただこうと思い宿舎である関西セミナーハウスから近い曼殊院と平安神宮へご案内し、夜は四条河原町、新京極などへおつれした。

8月28日(日)

京都駅にぐる途中東本願寺に立ち寄り、宗教について話し合った。正午頃新幹線にて名古屋につき、午後は戴さんのご希望で宿舎で休養していただくことになった。

8月29日(月)

国際結晶学会前期会長の名古屋大学工学部加藤

### 1. はじめに

日中科学技術交流協会(当協会)のご援助によって1983年8月28日から31日までの4日間、中国科学院北京生物物理学研究所研究員戴全壁博士を名古屋大学の私達の研究室へお招きし、さらに筑波の高エネルギー物理学研究所にある放射光実験施設にご案内した。

北京生物物理学研究所には私どものグループからは1979年以来3度、私自身も2度インスリン構造研究のために訪れており、その訪中記録はすでに1981年4月20日発行された日中科学技術 No. 20 に掲載させていただいた。それに対して、北京から私どもの研究室にきていただいたのは今回が最初である。

そのような次第で、この機会に日本の様子を少しでも多く知ってもらいたいと思い、ハードスケジュールと知りながら盛り沢山の計画を折り込んだ。

教授が国際結晶学会会長である Karle 氏及び御夫人(アメリカ), ヨーク大学の Wolfson 教授及びケンブリッジMRC研究所の Diamond 博士(イギリス)らを御招待になり, 工学部で結晶構造解析についてのミニシンポジウムを開催された。戴さんにもそこへ出席していただき,

“Determination of the crystal structure of despentapeptide insulin (DPI) at  $2.4 \text{ \AA}$  and refinement of insulin structure at  $1.2 \text{ \AA}$ ”

と題する1時間の講演を下さるようお願いした。中国のインスリン構造研究は現在でもなお、国を代表する研究でありしたがってレベルが世界的にみて単に高いのみならず幅も広い。戴さんは英語での講演ははじめてのことである上に結晶解析の分野で世界的な大物にまじって講演するというので前日から随分緊張なさっていたようである。前日の午後からはずっとそのための準備をなさっていたとのお話であった。

講演会には夏休み中にもかかわらず30名ほどの方が学内, 学外から出席された。戴さんは豊富な結果を沢山のスライドを使ってわかりやすく説明して下さったので, 講演後, 外国の出席者を含む多くの方々から質問責めに合われた。これは中国のインスリン研究に対する関心の高さを表わすものと考えている。これを機会に私達だけでは

なく名古屋大学の多くの方々に北京での研究成果を知っていただけたことは非常によかったと思う。昼食後には超強力X線室を見学され, 加藤教授ご自慢の  $1.5 \text{ \AA}$  X線発生装置を見られた。そしてシンポジウムは午後4時に終了した。

そのあと Diamond さんが私達のインスリンの電子密度分布図を見たいと言われたので, それでは戴さんが北京から持ってこられたものと比較してみませんかと提案し, Diamond, 戴, 坂部貴和子と私の4人でタンパク質の解析について討論しながら, 比較を行った。Diamond さんは Computer Graphics をタンパク質のX線結晶構造解析へ応用し, この分野における研究で世界をリードされている方である。我々も, 北京グループも近い将来この技術を導入したいと考えているのでそれについての討論は両グループにとってたいへんプラスであった。そのあと平松博士に名古屋大学大型計算機センターを案内してもらい, 博士の専門であるコンピューターグラフィックスを使った研究成果を説明してもらった。



写真1 インスリンの電子密度分布図の比較を行っているところ(名古屋大学理学部化学科)。向って左より, 坂部貴和子, 戴全壁, 坂部知平, 佐々木教祐氏。

8月28日(火)

私達のグループのメンバー3名と戴さんとが研究室に集まり北京から持参されたインスリンの $1.2 \text{ \AA}$ 電子密度分布図と私達の $1.1 \text{ \AA}$ のものとの比較を行った(写真1)。前日の比較でインスリンの部分は殆んど問題がないことが明らかになったので、今回は結晶中に $\frac{1}{3}$ 含まれている水の構造について行うことにした。水の構造についてはまだその決め方に確立した方法がないので、全く別の場所で、別の方法を使ってどこまで同じ構造が得られるかということはこの分野の研究の発展上多くの人々が注目しているところである。しかるに、北京グループが決めた多くの水の位置が我々のものとほぼ一致することがわかったことは非常に大きな成果であった。北京グループはまだ精密化の途中であるのでさらに精密化をすすめた段階で再度比較を行うことを約束した。戴さんが研究中のDPIインスリンもすでに $1.5 \text{ \AA}$ までのデータが集められており、その構造の精密化も行うとのことであるので、3つの図の比較はさらに興味深いものとなるであろう。戴さんの滞在期間が短かく北京ではまる二日かけて行った比較を半日たらずで終えねばならなかったことはいかにも心残りであった。

午後3時頃より医療技術短期大学の佐々木博士の研究室を訪問した。博士はインスリン研究グループの一員であり、1980年には我々のX線結晶構造解析のシステムを北京生物物理学研究所の人達が使えるようにフィットした人である。戴さんは主にコンピューターのお仕事をしておられるので二人の間の討論は実り多いものであったとのことである。

佐々木氏は北京でフィットしたプログラムシステムがうまく働いており、それを使って多くの成果があがっていることに満足している様子であった。また解析された構造に関する情報の入手に関しても話し合われた。その結果中国ではまだまだ情報不足に悩んでいることが明らかになった。夜は佐々木氏の家に招待され、日本の家庭で奥さんご

自慢の日本料理を楽しんだ。

8月31日(水)

朝8時17分のヒカリにのり、筑波にある高エネルギー物理学研究所に伺った。すでに我々が最初に北京を訪問した時から両グループの間で「タンパク質の構造と機能及び物性に関する共同研究」を将来実行したいという夢があった。同研究所に建設された放射光利用施設は世界でも数少ないものであり、強力でしかもX線の波長が自由に選択できるとの点においてタンパク質の解析には魅力ある光源である(中国にも小規模のものを作る計画がある)。そこで、普通のX線発生装置を使って強度データを集取することが困難な結晶や重原子誘導体を作りにくいものをこちらで写真を撮り共同研究をしてはどうかと考えた。私は5年がかりで、この線源に適したタンパク用ワイセンベルグカメラを製作し、すでに試験的な実験を一度行いある程度ポジティブな結果が期待できそうなるまでやっとうごきつけた。そこで共同研究を開始するにあたりどうしても放射光利用実験施設や私のカメラを見てもらい、また所員の方々とも直接に話し合う機会を作りたいと考え、ご案内することにした。

研究所に着いたのは午後一時であった。長旅のため少々お疲れの様子であったが、時間がないので昼食後すぐに見学をはじめた。電子ストレージ・リングのまわりに配置されている測定機器については私が説明しながらまわったが広いので2時間以上かかった。また電子線型加速器については研究所の松下助教授の説明をお願いした。

また、今回インスリンとその誘導体の3種類の結晶を持ってこられたのでそれに関する実験計画についても話し合い、できれば秋季に放射光を使って予備実験を行いうまくゆけば冬季に解析のためのデータ収集を行うことを約束した。

### 3. あとがき

9月1日戴さんは忙しい日本での日程を終えて中国科学院からきていた3人の同僚達とともに成

田をたつた。今回の戴さんの名古屋大学訪問を機会にインスリン構造研究の交流がますます深まることを私達は強く望んでいる。また、それを今後強力に進めるために来年からは予算を得て本格的な共同研究を発足したいと考えている。そして、

タンパク質の結晶構造解析は両国間で真の意味での共同研究が成立する数少ない分野の1つであるから長期的な展望の上に立って着実に進めてゆきたいと考えている。

### 中国における教育の最近の発展, その高等教育組織(機関)について

協会事務局長 肥後 孝

1. 1980年総計( )内は前年度を示す。  
学校数675(633), 学生数1144千人  
(1020千人), 登録学生281千人(275千人)  
うち大学院生21,604人
2. 高等教育は質重視の発展と量的には堅実ペースで、いまの社会の政治、経済面の劇的変化と科学技術の急速な発展は、次のことを求めている。即ち、高等教育の構造を様々に、融通の効くものとし、総合及び単科の大学は科学研究と効果的な教育を結合し、学際的及び多部門分野研究機関を創設し、新しい学部、部門を開設し、専門の再調整、教育課程及び教育計画を改編して、重点を学生の知識及び能力の発展に置いた基礎理論及び技術の教授法などの確立。

上の全様相は、現代化のために速かな解決を求められる重要問題である。

中国の高等教育は、復旧と調整を通じて、この2年間(79, 80年)に広汎な変更を行ってきた。現在われわれは、次の課題にその努力を傾注している。

- (1) 調整の過程における高等教育の構造を着実に改造して行くために、教養学科、教養部及び諸課題を適当な均合でかつ現実的に調整し、新学問分野を発展させ、欠陥を埋め、弱点を強化して、経済、法律、経営管理及び人文学の担い手の拡大

等によって、高等教育における社会科学及び自然科学の間の不均り合いを経済構造の変更の必要に合わせて変えて行く。

- (2) 調整の基盤の上に、高等教育機関に対し望ましい課題、計画、規模、授業時間の長さ、及びスタッフの数を明らかにし、研究機関を新たな設備及び適格者で充すように変えて行くこと。

- (3) 重点大学と大専門及び大プロジェクトの数は、それらが他の研究機関を教育、研究面でリードできるようにし、しかも旨く運営できるような具合に努力を傾注する。

- (4) 高等教育機関における単位スクーリングの長さを変え、2~3年以上のジュニアカレッジ及び機関をより多く創設すること。

- (5) フルタイムの大学の主な仕事は、その質を上げることであるが、来るべき教年内に数字で表わせるような発展は限られよう。われわれは、高等教育で“2本脚でまともに立つ”政策を固執したいが、現行の交換学生に積極的な学校や、TV放送、通信教育、予備校、国家試験を目ざす自学自習で免許をとる人々のための着実な計画も広げていく。

最後に、1981年から学位制度に力を注いでおり、学位規則の実施は中国の教育コースの発展を確実に促進し、科学技術のレベルを高揚させるものとなる。

### 中国の大学における集中講義について

協会事務局長 肥後 孝

「半導体物理」について、東北大学電気通信研究所の御子柴教授が、北京大学で集中講義を実施

することについて、国務院教育部及び同大学王学珍副学長からその実現を歓迎する御返事を戴いて

いた。しかし、相互の通信連絡上の若干の遅延から、本年3月末から4月にわたる予定は変更せざるを得ないこととなった。結局1年延期してその実現を図ることが双方の了解事項となっていた。

その後、東北大学において、明年度から同教授が中心となって進めるべきある実験施設及び同教授の研究室が文部省特定研究のサブセンターとして発足する予定が生じ、再延期の必要が生れた。このことが、会長等の訪中出発前に生じたため、訪中の際に、お詫びを申し述べ、併せて中国側大学での集中講義等に関する今後の円滑な進行を図るために率直な意見交換を望んでいた。

事前の予定では、北京大学に当方から参上する筈であったが、哈爾濱からの帰りの飛行便の遅れなどから、1日延期となり日程の都合上、帰国前日の夜8時に、王学珍副校長と3人の先生が宿までお出向き下さった。

#### 1. 御子柴教授集中講義の延期

北京大学は、同教授の講義を大変歓迎され、熱心に準備され、本年3月には受講予定の学生12名には、同教授の300頁以上の著書のコピーを用意しておられた。しかし延期のため学生達は、最終学年における受講の期待に添い得ない次第となった。

これらを併せて、会長からお詫びを申し上げた。その節、同大学は明年3月の講義をめざして、既に準備中であるとの話があった。

我々は、8月に東北大学の事情から、御子柴教授は、明年も不可能なことを告げて、今後の問題について若干の懇談を御願いした。

王先生は、実は御子柴教授からの8月のお便りは拝見していないとのことで持参した写を手交し、了解を願った。明年のことは、御子柴先生は大学の事情なので個人的に気になさらないで下さいと述べられた。そして三年位は待ちましょう、その間御子柴先生は新しい仕事で新しい成果を上げられることを望みたい。そのあとで、同教授が講義に来られるときは、今年聴けなかった学生も参加できるチャンスをつくりましょう、との話が

あったのでわれわれは、学問に対する同校の熱意を御子柴教授にもお伝えすることを約束した。

#### 2. 中国の大学における集中講義等の参考事項

(1) 一般に、国立大学教授は、外国出張のための文部省内の手續に最低1カ月を見込む必要がある。このため、正式招待状は、少くとも2カ月前に関係大学(招待教授)の手許に着くよう配慮が必要である。

この点を理解されて、事前準備の打合せ事項は3~6カ月内に双方から了解点に達するよう留意されることが望ましい。これは了解された。

(2) 中国の大学の休暇などのあり方が日本側でよく理解されていない感じがあるとして、北京大学の例を伺ったので御参考に供する。

a. 1年は2学期制で、第1学期は9月1日から1月半ばまで、冬休みが大体4週間ある。(この間に正月休が入る)。この期間は先生方はとくに学校に来る必要はない。学校内に先生方の宿舎もあるので、学校あての手紙は宿舎にいる先生は入手できる。地方に帰っておられる先生は、すぐ連絡がとれない事情がある。なお職員は冬休中に2週間の休暇がとれる。

第2学期は、北京大学は2月22日から7月10日まで、従って、7月10日~8月末までは夏休みで、学年休みと重なっている。職員の休暇は3週間である。

b. 集中講義については、(i)学部学生は、休暇以外の平素授業のある時期が望ましい。(ii)大学院生とか、若手研究者については、事前によく準備した場合には休みを利用できるかも知れない。訪中される人及大学側の事情を、受講する人によく理解される状況を生み出すため、事前の連絡が重要なことが判った。

c. 有山会長から、物理学会の時期や、毎年夏季に開く特別講座の例を説明し、さらに懇談したがその結果双方が事前によく連絡し合えば、かなり日中両国の交流を活発に行いうるようになる(日本→中国、中国→日本の企画事項参加)そうした可能性を、連絡を密にすることで申し

て行きたい。

d. チャンスは、お互いが活かす知恵を働かすことにより生れることが理解された。そして、今後とも、協会を通じた交流の活発化を図る意向を表明された。

なお、在日の中国大使館教育処及び教育部との関係は、これまでのように協会の方から必要な写を送るなど、円滑な交流の発展に留意されることは望ましいとされた。

## 日中交流ニュース

1. 中国水利学会水資源保護観測技術視察団の訪日  
団員名簿：団長、馮全文（水利電力部水文局工程師）、  
団員、陳鉄男（水利電力部物資局工程師）、  
劉岳松（南京水利水文自動化研究所工程師）、張  
桂芝（女性、通訳、華北電力管理局）

視察日程

10月3日に来日、10月22日離日するまでに  
次の諸施設を視察。

国立公害研究所、霞ヶ浦下水処理場、土木研究  
所、国土地理院、公害資源研究所、渡良瀬川工事  
事務所、中浅測器足利工場、利根川ダム統管理  
事務所、草木ダム、足尾ダム、明智平砂防、東京  
都水質センター、水運用センター、金町浄水場、  
江戸川水質測定室、東京都公害研究所、新河岸下  
水処理場、池田計器製作所、中浅測器本社、小松  
製作所、鶴見精機、琵琶湖総合開発関係諸施設、  
京大防災研水資源研究センター、淀川ダム統管事  
務所、大阪府水道部土木部関連施設。

なお、10月9日には、有山会長による招宴が  
行なわれた。

2 有山会長・肥後事務局長訪中の旅を終え帰国  
中国科学院長の招待を受けて、9月12日から  
中国の科学技術関係の中央組織と瀋陽、長春、哈  
爾濱の地方組織及び大学研究機関を訪れて、懇談、  
視察を終えて同24日帰国した。

懇談及び視察等の内容等に関しては、別途紹介  
することとして、ここには取りあえず日程順にそ  
の行動概要を紹介する。

9月12日(月) 成田発(JAL 983便)大阪  
經由北京着(出迎 中国科学院崔泰山氏ほか、劉  
星父子)。夜：中国科学院盧嘉錫院長招宴、同院

関係者7名と懇談。宿泊友誼賓館。

9月13日(火) 午前：中国科学院(外事局崔  
泰山副局長、姚佩君女史)と懇談。午後：中国科  
学技術協会(国際部叶正明副部長)、中国水利学  
会(陳鉄男訪日団員)と打合せ、協議。夜：中国  
科学技術協会周培源主席招宴、懇談)。

9月14日(水) 午前：北京工業大学訪問(懇  
談、視察)、さらに北京工大王学振校長招宴で昼  
食を共にして懇談。午後：中国科学技術中心訪問  
(余仁泉副主任ほか、国家科学技術委員会張宇傑  
氏同席)と懇談、協議。夜：国家科学技術委員会  
(副主任揚浚、委員吳興)及び国家科学技術中心  
(昼間出席者ほか1名)の招宴、懇談。

9月15日(木) 会長休養、事務局長は劉星父  
子と頤和園を訪れる。午後：北京発(CA6106  
便)瀋陽へ。(宿泊 遼寧賓館)

9月16日(金) 午前：中国科学院金属材料研  
究所訪問。午後：中国科学院林業土壤研究所訪問。  
夜：中国科学院瀋陽分院長招宴、懇談。

9月17日(土) 午前：東北工学院訪問。午後：  
沈阳市科学技術協会曹維民副主席と昼食を挟み懇  
談。夜：東北工学院畢克楨校長招宴、懇談。

9月18日(日) 会長休養、事務局長は、東陵  
及び故宮見学。(北京よりのCA6114便欠航の  
ため、翌日午前出発に変更)

9月19日(月) 午前：前夜欠航便到着、瀋陽  
発長春着。中国科学院長春分院秘書長の出迎を受  
け、遼寧賓館に入る。午後：中国科学院物理研究  
所訪問。夜：中国科学院長春分院長徐許氏招宴、  
懇談。(翌日航空便欠航判明、列車で哈爾濱行を  
知る)

9月20日(火) 午前：東北師範大学訪問，同校日本留学の予備校につき視察，中国科学院光学精密機械研究所訪問。午後：長春駅発列車にて哈爾濱駅着，黒龍江省科学技術委員会責任者の出迎をうけ宿舎国際ホテルに入る。

9月21日(水) 午前：哈爾濱電工学院訪問，昼：哈爾濱電工学院，哈爾濱船舶工程学院共催昼食会。午後：哈爾濱船舶工程学院訪問。夜：黒龍江省科学技術委員会朱典明主任招宴。

9月22日(木) 午前：東北烈士館で日本人革

命烈士，緑川英子，佐々木源吾両氏の遺影を拝したのち，哈爾濱市内見学。午後：哈爾濱空港より直航便で北京へ。(友誼賓館泊)

9月23日(金) 午前：全人代副主席敵済慈氏と人民大会堂で懇談。午後：教育部張文松副部長ほか関係者と昼食を挟み懇談。夜：北京大学王学珍副校長ほか3名の訪問を受け懇談。

9月24日(土) 北京発(CA927便)上海経由成田着帰国。

## 最近の中国科学技術

中国，博士・修士号授与権もつ大学・研究機関増やす

〔北京9月18日発新華社＝中国通信〕中国國務学位委員会学科評議組第2回会議が18日北京で始まった。会議の主要任務は，博士・修士号の授与権をもつ大学および研究機関の第2次リストを決定するとともに，博士・修士号の授与権をもつ第2次の学科，専攻および指導教官の名簿を決定することである。

席上，何東昌國務院学位委副主任委員(教育部長)があいさつし，1981年11月に國務院が最初の博士・修士号授与単位を発表してから，中国の学位制度は広範な人民大衆，とりわけ学术界で権威をもち始めていると述べ，「今回授与単位と指導教官をふやす際には，質を厳格に保証しなければならないが，同時にまた第1次発表の授与単位が少なかった文科系の財政・経済，政治・法律，管理および国にさしせまって必要な学科，専攻をふやさなければならない」ととくに指摘した。

何東昌はまた，古参専門家の役割を十分發揮させることを前提にして，博士号指導教官を担当する中年ひいては青年教師をふやすよう十分留意すべきであるとし，「中年は最も創造力がある時代である。現在の古参専門家のうち，中・青年の頃に重要な貢献をし始めた人は少なくない。いまこの問題を適時に解決しなければ，後継者不足があらわれ，わが国の學術陣の水準向上と高級専門人

材の成長に極めて大きな影響を与えることになり，社会主義的現代化事業の発展に直接影響を与えることになる。従って，条件の備わった中年教官をかなり多くふやすことは，戦略的意義をもつ大きな事柄である」と述べた。

武衡國務院学位委副主任委員が開幕式を主宰した。席上，黄辛白同委員会秘書長が第2次博士・修士号授与単位の審査について説明した。開幕式にはまた，張光斗同委員会副主任委員および有名な科学者，学者計400人余りが出席した。

### 光明日報の科学技術関係記事

(以下の記事については翻訳サービスします。会報No.28会告参照)

- \* 原発性三叉神経痛治療に突破的成果(7.24,900字)
- \* 激光(レーザー)技術が獣医領域で広く実験応用される(5.30,490字)
- \* 沈浩明がアメリカ留学中電磁気学の一つの尖端的問題を解決(7.15,830字)
- \* 南京大学馮端教授が結晶体欠陥の研究で突破的成果をあげる(6.6,890字)
- \* 清宮廷の美酒「八珍御酒」が再生される(7.24,500字)
- \* 北京で博士・修士学位授与の大会(5.28,1000字)
- \* 党和国家指導者が博士・修士代表と会見(5.28,1160字)
- \* 独立自主で高級専門人材を養成する道を拓こう—胡喬木の講話—(5.28,1970字)